

10月19日（日）サムエル記第一3章16～18節

「その方は主だ。主が御目にかなうことをなされるように。」（18節）

いつものように「わが子サムエルよ」とエリはサムエルを呼び、サムエルも「はいここにおります。」と答えます。しかし、いつもと違うのは、サムエルの心の中に、黙示のことをエリに知らせることへの恐れがあったことです。エリは、昨晚確かに主がサムエルを呼び、サムエルに語りかけを与えられたことを確信していたのでしょう。「主がおまえに語られたことばは何だったのか。私に隠さないでくれ。」と言います。私たちは、ここにエリの信仰の良心を見ることができます。本来であれば、厳しいさばきのことばは聞きたくないと思うことでしょう。しかし、主の御前に隠さないで語ってくださいと祈る信仰が与えられたいと願います。

エリに言われたとおり、サムエルはすべてのことをエリに知らせて、何も隠しませんでした。それに対してエリは、「その方は主だ。主が御目にかなうことをなさるように」と言います。その方は主だというのは、主が語られていることをエリが認めていることを意味しています。そして、この期に及んでは、エリはただ御目にかなうことをなされますようにとしか言うことができませんでした。私たちが、日々みことばを聞く中で、「その方は主だ」と、主が語っておられると確信したならば、私たちは謙遜に主の御前に応答しなければなりません。私たちは、日々どのようにみことばを聞いているのでしょうか。

10月20日（月）サムエル記第一3章19～21節

「主は再びシロで現れた。主はシロで主のことばによって、サムエルにご自分を現されたのである。」（21節）

時が経過してサムエルは成長しました。「彼のことばを一つも地に落とすことはなかった」とは、彼のことばがすべて成就したことを表しています。それは、主がサムエルに対する預言者としての召しをも確かなものとされたということです。ですから、それにより「全イスラエルは、ダンからベエルシェバに至るまで、サムエルが主の預言者として堅く立てられたことを知った」のです。

主は、みことばによってご自分の現れを明らかにされるお方です。ですから、みことばが語られるところに主は必ずおられます。1節に「そのころ、主のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった。」とありますように、そのようなみことばの飢饉、霊的な暗黒状態とも言える状況下にあっても、「主はシロで主のことばによって、サムエルにご自分を現され」ました。主は、

ご自身が語られることを謙遜に聞き、それに応答する者を求めておられますし、みことばを主からの幻として人々に説き明かす者がなければ、主のみことばは決して語り伝えられることはありません。そして、主はご自身のみことばとご計画の中で、必ず人を主の預言者として召し、その主の器を通して、ご自身のみことばを宣べ伝えさせ、主はその者とともについて、啓示されたみことばが地に一つも落とされないようにしてくださいます。そのことを通して、その人の召しが確かなものとされ、人々が喜んで主のみことばを聞くようにすべてのことを整えてくださいます。そう考えますと、主の預言者の働きは、主が伴ってくださることによってなされる働きであり、主の預言者とあるとおりに、主の働きだということです。ですから、主のみことばをまっすぐに語り、みことばを正しく説き明かすために召された者の働きが全うされるように今日も祈りましょう。

10月21日(火) サムエル記第一4章1～2節

「戦いが広がると、イスラエルはペリシテ人に打ち負かされ、約四千人が野の戦場で打ち負かされた。」(2節)

4章1節から新しいセクションが始まります。それに先立ち、3章19～21節を要約するようにして、「サムエルのことばが全イスラエルに行き渡ったころ」と言います。その後、ペリシテとの戦いの様子が記されています。ペリシテ人は、ギリシャ半島でミケーネ文明を築いた民族で、紀元前12世紀ごろにエーゲ海と地中海を通じてエジプトとパレスチナの南部海岸の平野地帯にまで進出してきました。恐らくここでもペリシテ人が、地中海に面した海岸から上陸し、そのまま上って来て、「アフエクに陣を敷き」(注：巻末地図4参照 エフライムの左上)イスラエルはエベン・エゼルに陣を敷きました。戦いが始まりますと、イスラエルはペリシテ人に打ち負かされ、約四千人が野の戦場で打ち殺されました。ここで、ある人が「ペリシテ人によって打ち負かされではなく、ペリシテ人に打ち負かされと書かれてあることに注目すべきです。」と、注釈を加えています。つまり、イスラエルがペリシテの兵士たちに完全に力負けすることにより打ち負かされたのではなく、むしろ主がペリシテ人との戦いを用いて、イスラエルが打ち負かされるようにされたということです。何のためでしょうか。それは、主のイスラエルに対するさばきのためです。すべての被造物を支配しておられる主は、みこころをすべて成し遂げられます。それゆえに、この主なる神を知っている私たちは、このお方を恐れなければなりません。そして私たちは、みこころとしてのさばきではなく、祝福をいただくことができるような歩みをすべきです。

10月22日（水）サムエル記第一4章3～5節

「兵たちはシロに人を送り、そこから、ケルビムに座しておられる万軍の主の契約の箱を担いで来させた。」（4節）

イスラエルが王政でない時代には、長老たちが権威を持っていて、政治的な課題などについて協議しながら決めていました。彼らは「どうして主は、今日、ペリシテ人の前でわれわれを打たれたのだろう」と言っていますように、主が自分たちを打たれたことに気がついていました。ですから、すぐにサムエルのような預言者のところへ行き、主のみことばをいただいたり、主のみこころを伺うべきでしたが、それをしませんでした。逆に、「シロから主の契約の箱をわれわれのところを持って来よう」と提案しています。契約の箱は、主の臨在のしるしと考えられていました。そして、主の契約の箱を戦場に持って来るとするのは、主が自分たちとともにいて、主ご自身が戦ってくださるとの意味がありました。つまり、彼らは契約の箱が自分たちに勝利を与えてくださると考えたのです。ここで私たちは、イスラエルの長老たちのいくつかの問題を見ることができます。まず一つが、主が自分たちを打たれたことを認めつつも、なぜ主がそうされたのかを問うことをしなかったのは、彼らが謙遜さを欠いていたと言わざるをえません。それと同時に、2章29節で、祭司たちが主へのいけにえやささげ物を軽く扱うことを主は指摘しておられますが、ここでは長老たちが神の契約の箱を軽く扱っています。それはイスラエル全体が主を恐れる気持ちを欠いていたことを意味しています。私たちは、何か問題が起った時に、そのことを深く考え、みことばをいただき、主のみこころを伺いつつ、主に熱心に祈り求めながら、そして時には悔い改めつつ問題を解決するのではなく、自分たちで話し合っただけで知恵を出し合う中で手軽に問題を解決しようとするのではないのでしょうか。そこに主への恐れや主の御前に謙遜に出る信仰はあるのでしょうか。

10月23日（木）サムエル記第一4章6～11節

「神の箱は奪われ、エリの二人の息子、ホフニとピネハスは死んだ。」（11節）

6節でペリシテ軍は、イスラエル陣営から聞こえて来た歓声を聞きました。最初は何の歓声か分からなかったようですが、何らかのかたちで神の箱がイスラエルの陣営に来たと知ったとき、彼らは恐れて、「神が陣営に来た」と言いました。この当時は、国同士の戦いは神々が戦うと考えられていましたので、まさにイスラエルの神が自分たちと戦うために敵の陣営に来たと思ったのでしょうか。特に8節を見ますと、ペリシテ人たちは出エジプトのために神がエジプト

になしたみわざを聞いていたので、自分たちには勝ち目がないと恐れたのでしょうか。しかしペリシテ人は互いに励ますことで奮い立ち、イスラエルは完全に打ち負かされ、今度はイスラエルの歩兵3万人が打たれることとなりました。その結果、神の箱は奪われ、エリの息子のホフニとピネハスも死にました。ホフニとピネハスの死は、2章34節の神の人を通しての預言の成就です。

イスラエルの民の戦いは決して連戦連勝ではなく、敗北することもありました。例えば、ヨシュア記7章を見ますと、アイでの戦いにおいて敗北しました。敗北の原因の一つは、3節の言葉からも分かりますように敵を侮った傲慢さです。どんな小さなことであっても、全力であたらなければ、主は決して祝福していただきません。そしてもう一つの敗北の大きな原因は、聖絶の物の一部を取ったアカンの罪です。それによりアカンだけではなく、主の怒りがイスラエルの子ら全体に燃え上がり、それが戦いにおける敗北となって現れました。エリと二人の息子たちの罪とアカンの罪によるイスラエルの戦いにおける敗北は、罪を持ちながら決して戦いに勝利することはできないことを教えています。それは、罪を持っていては、主がともなる戦いを戦うことができないからです。私たちも同じです。罪を持ちながら、私たちは霊的な戦いに決して勝利をすることができません。私たちの交わりから常に罪が除かれているのでしょうか。教会全体と教会員一人一人において、常に罪の悔い改めがなされているのでしょうか。

10月24日（金）サムエル記第一4章12～18節

「彼が神の箱が奪われたことを告げたとき、エリはその椅子から門のそばにあおむけに倒れ、首を折って死んだ。」（18節）

戦場での様子を知らせるために、一人のベニヤミン人がシロに着きました。13節には「彼が着いたとき、エリはちょうど、道のそばの椅子に座って見張っていた。神の箱のことを気遣っていたからであった。」とあります。九十八歳で、その目はこわばり、何も見えなくなっていた（15節）エリは、単に年を取って肉体的に衰えていただけではなく、霊的にも老人になっていました。エリが真に気遣うべきだったのは、神の箱よりもペリシテと戦っていたイスラエルの民のことや自分の二人の息子たちのことであり、さらには二人の息子たちの罪から来る悲惨な最期のことであったはずです。そのことに彼が気がつき、息子たちを悔い改めに導いていたなら、イスラエルは敗北することもなかったでしょうし、二人の息子も死ぬことはなく、神の箱も奪われることもなかったことでしょう。年を取り肉体的に衰えても、なお霊的には衰えることなく歩むことは可能です。年を取り、信仰年限を長く重ねても、見るべきものを見ること

ができない霊的な老人にならないように気をつけなければなりません。

知らせを持って来た者を通して、エリはイスラエルの中から多くの打ち殺された者が出たこと、そして息子たちが死に、神の箱が奪われたことを聞かされると、彼はあおむけに倒れて死にました。また、20節を見ますとピネハスの妻も死にかけていたことが分かります。これが、2章27節から34節において、神の人がエリに語った罪のさばきの結果です。罪は決して人に幸いな最後を与えることはありません。そのことをおぼえて、罪を悔い改め、主に祝福される歩みをいたしましょう。

10月25日(土) サムエル記第一4章19～22節

「栄光がイスラエルから去ったと言って、その子をイ・カボデと名づけた。」(22節)

19節でエリの息子ピネハスの妻が出産間近でしたが、神の箱が奪われ、舅と夫が死んだとの知らせに衝撃を受けたのでしょう。陣痛が起こり、身をかがめて子を産みました。20節で彼女の世話をしていた女たちは、ピネハスの妻を慰め、励まそうとしたのでしょう。「恐れることはありません。男の子が生まれましたから」と言いましたが、彼女は、答えもせず、気にも留めませんでした。男の子が生まれたことが彼女には何の慰めにもならなかったことから、受けた衝撃の大きさをうかがい知ることができます。

21節で、彼女は「栄光がイスラエルから去った」と言って、生まれた男の子をイ・カボデと名づけました。この「イ・カボデ」とは、ヘブル語で「栄光はどこにあるのか」との意味で、まさに主の存在が失せてしまったことを嘆いている表現と言えます。その理由を、「神の箱が奪われたこと、また、しゅうとと夫のことを指したのであった」と説明されています。罪のあるところに、聖く義なるお方でわる神が存在されることは絶対にありません。もし教会であっても、個人であっても、悔い改めない罪があれば、いつの日にか必ず「栄光が去った」「栄光はどこにあるのか」と、嘆き悲しまなければならない時が来ますが、その時に嘆いても遅いのです。主が、恵みとあわれみによって、イエス様の十字架を通して悔い改めの道を私たちに備えてくださっています。そのことをおぼえつつ、主イエス様の十字架の血を仰いで、悔い改めによる罪の赦しを受けましょう。「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」(ヨハネの手紙第一1章9節)